

バリにおける芸能の社会学

金 田 文 雄

〈はじめに・楽園幻想とリゾート〉

バリには現在「神々の島」、「芸能と音楽の島」あるいは「最後の楽園」などさまざまなキャッチコピーが冠されている。もちろん、その背景にはこうしたコピーによって、世界中に数多く存在するリゾートの中でのバリの特色を際立たせ、その特異化を強調することでいっそう多くの観光客を招致しようとする意図があるからにはかならない。

かつて、多くの日本人旅行者にとって旅行先として意識される海外とは、ハワイがもっぱらこれを代表していた。あるいは、ひとえにハワイだけに特化されていたといっても過言ではない。「夢のハワイ」や「……飲んでハワイに行こう」などといった時代はそれほど昔のことでもなかったのである。もっとも、その当時もそうであったが、今もってハワイがそうした日本人旅行者にとってリゾートとして機能しているかという点、それははなはだ疑問であろう。なぜなら、短い日程でハワイ（そのほとんどはホノルルの、しかもワイキキとその周辺）に滞在し、ショッピングに狂奔する姿はリゾートというイメージからは限りなく遠いからである。ただし、近年ではオアフ島でもホノルルを離れ、あるいはマウイなどの他島を訪れるなど随分と多様化しつつはあるのだが。そして、その一方でこのことは、ハワイ以外の地へも旅行者や観光客の目が向けられたということをも示しているだろう。

こうして台頭してきた観光地の中で、香港やシンガポールは従来のハワイ型観光に、いわゆるグルメ指向を加味したものであろうし、また、グアム・サイパンなどは海そのものを楽しむ地として人気を集めてきた。しかも、これらの両者はハワイよりも、より身近ではがっていった短期間での旅行（レジャー）を可能にしてきたのである。ここで再確認しておきたいと思う。まず、ハワイこそが多くの日本人にとって海外旅行の原点であった。「はじめにハワイありき」だったのだ。そして、このハワイの持つ要素の中からショッピングの部分が特化して、香港とシンガポールが、また海が分離してグアム・サイパンなどが浮上してきたのであろう。近年は随分と改善されてきたとはいえ、まだまだ日本人が余暇に付きやす時間は少ないだろう。

ハワイは、短いツアーでも通常は最低でも6日間という設定になっている。(もっとも往復に時間がかかるために、実質的には3日半といったところだろう)ところが、香港・シンガポール、あるいはグアム・サイパンならば3日間もしくは4日間で行けるのだ。費用の総額ももちろん少なくてすむだろう。そして、これが日本人にとっての海外旅行の第2波を形成したのである。もっとも、ハワイは依然として健在であり、新たな層を含んで拡大していった先がこうした地だったということである。

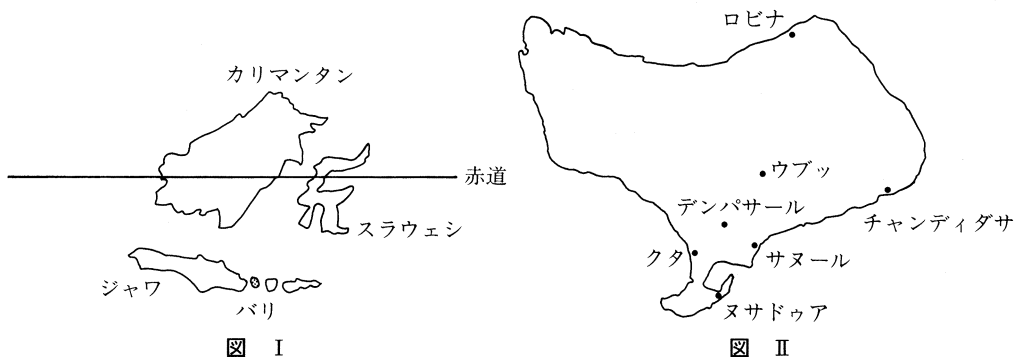
では、これらの観光地の今後はどうだろうか。香港はこれからももっとも手軽な外国のひとつとして、さらにはショッピング天国といったイメージにも支えられてそれなりに存続しつづけるだろう。もっとも、過日の中国への返還による減少は避けられないと思われるが。また、シンガポールはたしかに美しくはあるが、はたしてそう何度でも行きたくなる程の魅力を持っているだろうか。グアム・サイパンにしてもしかりであろう。この中ではシンガポールは、すでにその危機感への危機から新たにインドネシアをまきこんで、ビンタン島のリゾートを開発し、ハワイ型に一步近付こうとしているようだ。

ここで、もっと広く目を向けて世界のリゾートにまで拡大してみよう。まず地中海だけでも、スペインのアンダルシアのコスタ・デル・ソルあたりから、南仏コートダジュール、リヴィエラを経て、果てはトルコのアンタルヤあたりまで。また、その対岸はチュニジアあたりから、マヨルカ、シチリアを経てギリシアの島々まで(限定的にはこのあたりはエーゲ海というようだが)。インド洋にはセイシェル、モーリシャス、モルディヴが、アンダマン海にはブーケットがあり、タイにはこれ以外にもコ・サムイやフアヒンなどがある。マレーシアはペナン、ティオマン、ランカウイを擁し、さらに太平洋に目を転じればフィリピンにはセブ、ボラカイがあり、フィジー、ニューカレドニア、タヒチ、オーストラリアのグレイト・バリア・リーフなど実に枚挙にいとまがないのである。

このように膨大なまでのリゾートが各地に点在するのだが、そのいずれもの各国政府観光局、あるいは多国籍企業を含めた観光業者によって観光客の誘致がはかられていることはいうまでもない。ところが、その一方で、たとえばこれらのいずれかのリゾート地を複数訪れてみると、(あるいは帰国後にそこでとった写真のアルバムを眺めてみれば一層のこと)そのいずれもが随分とよく似たものであることに気付くだろう。美しい海と豪華なホテルと、椰子の木、庭にはブーゲンビリアにプルメリア——これらはたしかに熱帯リゾートのムードを高めるだろう。しかし、何処に行ってもこれなのだ。そこでは植物層の固有性は無視され、他所から移植された、^{●●●}いかにもといった熱帯らしさを演出することにこそ工夫がこらされているからである。食物こそは多少違ってはいるものの、これとてもそれほどの大差があるというわけではない。つまり、各地のリゾートは今、一種の行き詰まりを見せているともいえるのである。

さて、そうした現状の中でリゾートとしてのバリとはいえば、実は他の海浜リゾートとは一線を画する要素を持っている。すなわち、ホテルこそはそれほどの違いはないものの、建築物とそしてこの地方にしかない芸能を有しているのである。そして、バリへの観光客に、他のリゾートよりもはるかにリピーター（再訪者、再再訪者）が多いことの理由の一端がここにある。

〈バリの地理的位置と島内のリゾート地〉



バリはジャワ島の東に隣接し、南緯8度3分から同50分まで、東経114度25分から42分までに位置する、東西約140キロ、南北およそ86キロ、面積にして5621平方キロメートルの小島である。西にあるロンボク島との間は約35キロメートルあり、しかもこの間の海峡は水深も深く流れもまた早い。そして、ここにかのウォーレス・ラインが引かれている。すなわち、バリまではアジア動植物区であり、それ以东はオセアニア区に属することになる。¹⁾

さて、このさほど大きくもないバリであるが、現在いわゆる主立ったリゾート地は3ヵ所ある。まず、島の南端西部に位置するクタ²⁾ (Kuta)・レギャン (Legian) 地区、同じく南端の東部にはサヌール (Sanur)、そしてさらなる南端のバドゥン半島の東端のヌサ・ドゥア (Nusa Dua) が、それである。これらのうち、リゾートとしてもっとも古いのはサヌールであるが、現在ではクタ・レギャン地区が最大の集客力を持っている。したがってホテルの数もここがいちばん多い。そして、これに呼応して、観光客向けの店やレストランも多く、享乐的なムードを好む人々には最適の地であるといえる。ただし、このクタ・レギャン地区は波が高く、したがってサーフィンは適するものの、海水浴にはあまり向いているとはいえない。しかし、この地区はビーチ沿いに高級ホテルが、そこから内側にかけて中・低級ホテルや、高級ブティック、観光客向けのレストラン、土産物店などがひしめいている。また、かつて銀細工や民芸品を売る路上商人が数多くたむろし、それはそれで楽しかった反面、苦情も多く、1996年からは登録・

認可制になり規制が行なわれたようだ。もっとも、この背景には経済原則にしたがって、ジャワ島などから流れこんできた新興勢力を規制しようとするバリ側の事情もあったようだが。なお、近年はクタ・レギャン地区があまりにも過密化し過ぎたために、さらにその北方のスミニャック地区が、また南方にはジンバラン (Jimbaran) 地区が新しく展開し、それぞれ幾分かかぬけた高級ホテルが進出している。そして、こうした新興の地域はクタ・レギャンの喧騒を避けて静かなリゾート・ライフを過ごしながらか、買い物や食事には何でもそろうクタ地区に出掛けるという需要を満たしているのである。

次にサヌール地区であるが、先のクタ・レギャン地区がバリ島南部の西側に位置していたのに比して、こちらは島南部の東海岸にある。そして、クタがあまりお金のあるとはいいがたいサーファーに着目されたことに端を発したリゾートであるとすれば、サヌールはむしろ当初はのんびりと海を眺めて過ごす避暑客が中心であった。したがって大型リゾートホテルの建設はむしろこちらの方が早く、したがって今では幾分古びたといった印象も避けられない。ここもクタ同様ビーチ沿いに大小のホテルが立ち並ぶが、クタ地区ほどの広がりや奥行を持っているわけでもない。なお、このサヌールの最北端に、日本の戦後保障によって建設された巨大なグランドバリビーチホテルが立つが、これが周囲の景観を著しくそこなっているために、以後、バリではいかなる建物も椰子の木の高さを越えないという条例が施行され現在にいたっている。こうなるとグランドバリビーチの建設ははたして功であったのか、罪であったのかかわからない。なお、クタの海は波が高く、海水浴にはあまり適さないとしたが、このサヌールは遠浅で干潮時にはずいぶん沖合まで行くことができる。また、ここはサンゴ環礁でもあるため、リーフによって波はさえぎられている。その上、ビーチに続く浅海中にはヒトデ、ウニなどが多量に見られ、クタとは違って家族連れにも楽しめるリゾートになっている。サヌールは、このところ、ややその人気は低落傾向にあったようだが、クタの喧騒を嫌う人々が近年ふたたびここに戻ってくるといった現象がみられるようである。

最後にヌサ・ドゥア地区であるが、ここは政府の肝煎りで開発された新しくも高級なリゾートである。海の美しさは大きなリゾートのうちではここが一番であろう。この地区は区域の全体がトータルに囲いこまれており、したがってホテルはすべて大資本による高級ホテル、あるいはそれに付随した高級レストランなどしか存在しない。日本人観光客の密集度もおそらくここが一番高いだろうが、ホテル代等の物価もまた圧倒的に高いのがこの地域である。たしかに安全で快適ではあろうし、ここに滞在しておれば宵々ごとに各ホテルの庭からはガムラン（もちろんテープなどではなく、生演奏の）の調べが流れてくるといった具合である。しかし、ここにいて、ここだけを見て、それがバリかというそれは大いに疑問である。なぜならば、それは単にバリ風の色付けがほどこされたというだけの高級リゾートに過ぎないからに他ならな

い。なお、この地区自体は閉鎖されているために、より北側にタンジュン・ブノア (Tanjung Bunoa) と呼ばれる新しい、これも比較的高級なリゾート開発が広がっていった。

以上の3地域が主だったバリのいわゆるリゾート地なのであるが、これ以外の場所についても少し触れておきたい。かつては（といってもそれほど以前のことでないが）電気もなく、ひっそりとした小リゾートであったチャンディ・ダサ (Candidasa) も今では新しいホテルが随分と増え、当然のことながら電化も整っている。このリゾートの特色は、静けさと、そして何よりもその海の美しさにあり、シュノーケリングなどには最適なのだが、ただ残念なことにビーチの真近に防波堤が迫っているために、解放感の乏しさは否めない。今後、この地区がリゾートとして発展するためには（ただし漁業との兼ね合いなど問題も多いだろうが。そして、筆者はかならずしもリゾート開発に賛成しているわけではないのだが）、この防波堤を撤去し、それに代わるものを造る必要が生じてくるだろう。なお、この地域はどういう訳か、ことさらにドイツ人観光客の支持を集めているようだ。

もうひとつ、これも最近とみに、いわゆるリピーターの間で人気が高まりつつあるのが島の最北部に位置するロビナ (Lovina)・ビーチである。この最大の呼び物はカタマラン（現在はエンジンを搭載した双胴船）によるイルカ・ウォッチングであろう。土地の漁師たちの副業によるせいか、その値段も少なくとも今のところは、驚くほどに安いものである。また、同様にカタマランに乗って少しく沖合まで出たシュノーケリングも、人気を集めている。たしかに魚の種類も多く、また水の透明度もきわめて高い。さらにはビーチからは、遠くにジャワ島の高峰プロモの雄大な姿も望めるといったふうに、景観にも恵まれている。すなわち今後、観光客の増加を大いに期待してよいところだろう。しかし、その一方で問題がまったくないというわけではない。ひとつには、ビーチが環礁によって囲まれていることがここではやや災いして、波がなすぎで、まるで池で泳いでいるような気分になることだ。そして、これはおよそ改善が不可能である。がもっとも、これは単に好みの問題であるのかもしれないが。ただ、もうひとつ問題があり、それはかつてクタ地区がそうであったように、ここでは今ビーチの至る所にそうとうに強引な物売りや、客引きがいることだ。「いる」と述べたが、おそらくは近郊の農村の主婦や、あるいは他の土地から（場合によってはジャワ島からも）観光客の落とすお金を目当てにやってきた者達がひしめいているというほどなのである。ビーチだけに限れば、観光客ひとりあたり5人から場合によっては10人といった比率に達するのではないと思われる。マジック・マッシュルームを中心としたドラッグの勧誘もまた多い。この地区はいわば今、過渡期にあるのであろう。

さて、ここまでは海のリゾートを見てきたのだが、そしてこの地区は本来はいわゆるリゾート地と呼ぶには大いに語弊があるのだが、バリ島内陸部にあるウブッ (Ubud) にはぜひとも注

目しておく必要があろう。なぜなら、こここそがバリにおける絵画と芸能の中心地に他ならないからである。芸能については次項で述べるが、ここではまず、この地域に発達した絵画の状況を概観しておきたい。現在、ウブッとその周辺には、プリ・ルキサン美術館、ネカ美術館などがあり、そこではバリ絵画の精髓を見ることができる。だが、そもそもバリ絵画の発展にとっては、ヨーロッパとの出会いは不可欠であった。かつて、ヨーロッパから楽園を求めている人々がバリにやってきたが、そのなかにウォルター・シュピースがいた。そして彼の存在なくしては今日のバリ絵画を語れないのである。彼がそれ以前からあったバリ絵画に遠近法を持ち込み、また事実上これを世界に通用するものにまで高めるのに貢献するとともに、広く紹介もしたからである。画面いっぱいに所狭しと人や植物などが細密に描かれた絵画がその典型的なものであるが、今日ではそれ以外にもさまざまな新しいスタイルが試みられ、ウブッ周辺にはそうした工房もまた多い。

〈バリの芸能〉

今日、多くの観光客にとっては、ウブッに行くまでもなく、最も簡単にバリ芸能に接するにはバトゥブラン（デンパサールの近郊）に行けば事足りる。そこでは、毎日バロン劇の公演が行なわれているのである。もちろん、これはいわゆる本物の宗教儀礼というわけではなく、観光客向けにアレンジされたものではあるが。それは1930年代から存在したとはいうものの、そもそもがヨーロッパからの観光客に向けて行なわれていたものである。ただし、ではそれ以前にバリの伝統芸能が存在したかといえば、あるにはあったが、けっしてそれは体系的なものでもなかったのである。つまり、バリにおける伝統・伝承芸能は、少なくとも現在あるような形で存続していたというわけではなく、そもそもが観光と不即不離の形で生まれ、発展してきたという奇妙な関係にあったわけである。このバロンは、その原典をインドの叙事詩「マハーバーラタ」に持つのだが、基本的には聖獣バロンと魔女ランダとの果てしなき戦いを描いたものである。ただ、ここで注目すべきは、それがいわゆる勧善懲悪におわるのではなく、聖なるものと邪なるものとが一種の共存を果たしていくこと



であろう。このあたりの哲学的意味については中村雄二郎氏の「魔女ランダ考」に詳述されている。³⁾

バドゥプランには、連日バスで団体客がおしかけるのだが、やはり、なんといってもそれはダイジェスト版であり、もう少し本格的にバリ芸能を鑑賞するには、先のウブッに行く必要がある。まず、以下に、ウブッ地区を中心とした一帯で催される舞踊団と、その会場の一覧表⁴⁾を掲げておきたい。

グループ名	パフォーマンス	会場	曜日
Sadha Budaya	レゴン, パリス, トルナ・ジャヤ 他	プリサレン王宮	月
Sandhi Swara	パロン	バダン・テガル・クロッド	月
Bina Remaja	ラーマヤナ	プリサレン王宮	火・土
Kencana Sari	レゴン, パリス 他	バダン・テガル・ムラジャン・アグン	火
Panca Arta	レゴン, パロン 他	プリサレン王宮	水・木
Sekar Alit	子供たちによるラーマヤナ	バダン・テガル・ムラジャン・アグン	木
Jaya Swara	パリス・グデ, レゴン・スプラバ 他	プリサレン王宮	日
Trene Jenggala	ケチャ, サンヒャン・ジャラン 他	バダン・テガル・ムラジャン・アグン	水・日
Semara Kanti	パロン・ランドウン	バダン・テガル・ムラジャン・アグン	金
Gunung Sari	レゴン, パリス, トベン 他	ブラ・ダラム・ブリ	土
Semara Madya	レゴン, パロン 他	バンジャール・トゥンガー	水
Semara Jati	レゴン, クビャール・トロンボン 他	バンジャール・テガス・カワン	火
Mekar Sari	タリ・クリンチ, テヌン 他	マンダラ前	日
Semara Ratih	パリス, レゴン・ジョボック 他	ブラ・デサ・クトゥー	火
Tirta Sari	レゴン 他	プリアタン王宮	金
Gurnita Wreksa	シワ・ラトリ・ダンス 他	ブラ・ダラム・ブリ	月
Ganda Sari	ケチャ, サンヒャン・ドウダリ 他	ボナ村	週4日
Desa Adat Ubud Kaja	ケチャ, サンヒャン・ジャラン	ブラ・ダラム・ウブッ	金
Banjar Mawang	チャロナラン	マワン村集会所	木・土

これ以外にもいくつかのパフォーマンスが催されているのだが、これだけでも実に驚くべき数だというべきであろう。すなわち、私達観光客はほとんど毎日、ウブッ近辺のどこかでこうした芸能を見聞きすることが可能なのである。ちなみに、筆者が昨年（1996年）に鑑賞した中からいくつかの公演のプログラムをその具体的な例として見てみたい。

① GUNUNG SARI PELIATAN

- I . OVERTURE
- II . GABOR/PENDET
- III . BARIS
- IV . KEBIAR TEROMPONG
- V . LEGONG KERATON
- VI . INSTRUMENTAL PRELUDE GAMBANG SULING
- VII . OLEG TAMBULILINGAN
- VIII . MASK DANCE
- K . INSTRUMENTAL

② SEMARA RATIH

- I . TEMPLE PROCESSION
- II . TABUH JAGRA PARWAT
- III . BARIS
- IV . LEGONG KATON JOBOK
- V . TABUR GATUR ANGRIT
- VI . KEBYAR TROMPONG
- VII . TABUR SUARA SANDI
- VIII . TERUNA JAYA

③ SADHA BUDAYA

- I . KEBYAR DING INSTRUMENTAL
- II . GABOR
- III . BARIS
- IV . LEGONG KRATON
- V . KINDAMA INSTRUMENTAL
- VI . TARUNA JAYA
- VII . OLEG TAMBULILINGAN
- VIII . TOPENG TUA MASK DANCE
- K . CLOSING INSTRUMENTAL

これらの3つのグループは、そのいずれもがバリを代表するといつてよいものであり、それぞれが海外公演の実績も持っている。①の GUNUNG SARI は、その歴史も古く、プリアタン村でマンダラ翁達によって1926年に結成されている。また、②の SEMARA RATIH は、STSI（芸術大学）の教授と卒業生を中心に結成されている。常に新しい試みに意欲的に取り組むグループとして知られ、そのレベルはひじょうに高い。もうひとつの SADHA BUDAYA は創立こそ1980年と新しいが、今ではリーダー的な存在である。また、とりわけ踊り手の人材が豊富でレパートリーが広いことも特筆されよう。

プログラムには、それぞれの特徴もあるが、また概ねの構成はさほど変わらないともいえるであろう。ただ、演奏のあり方や、舞踊家によって、実際に見る公演の内容や印象はかなり違ったものになってくるのである。また、公演場所による違いも無視できず、プリサレン王宮で行なわれた SADHA BUDAYA の公演は、背景もさすがに王宮だけあって立派で照明効果もよいのだが、それだけにかえて観光客向けのパフォーマンスといった感が強いといわねばならない。一方、ダラム・ブリ寺院で行なわれる GUNUNG SARI は、背景こそ素朴だが、ムードははるかにそれらしいといった趣を持っているのである。

それぞれの楽曲についての解説は他書にゆずるが、私が見たいずれの公演もほぼ満員といつてよい状態であった。エスニック音楽等への関心の高まりとともに、今後の将来性も十分あるように思う。



〈バリの言語状況〉

バリの言語事情は、日本とは随分とその状況を異にしている。まず、日常で彼ら同士でされているのは（したがって一般のバリ人にとってのマザー・タングは）バリ語である。次に、学校教育では小学校からインドネシア語を学ぶ。もちろん、それ以前にも、特に街中ではインドネシア語に接する機会は多くあるだろうが。そして、そもそもこのバリ語とインドネシア語とは、まったく系統を異にする言語であるといわれている。したがって、彼らにとってインドネシア語は本質的に外国語にはかならないのである。つまり、一般のバリ人の大半は（純然たる

農民以外は), バイリンガルであることを余儀なくされている。さらには, クタやサヌールなどで観光客を相手にする仕事に携わる人々は, 大ホテルの従業員やマネージャーから, 個人の露天商にいたるまで皆, 多かれ少なかれそれぞれの必要を満たすに十分なといってい程度英語を話す。なお, かつてはバリにやってくる観光客の大半はヨーロッパ人であり, また, 地理的にバリに近いオーストラリアからの人々であった。現在はおそらく, オーストラリア人が観光客のうちのマジョリティを形成しているといっていだろう。ヨーロッパからの人々もいるにはいるが, 相対的な数はさほど多いという程でもないし, また, 彼らの大半は英語を話す。なお, バリに滞在するヨーロッパ人は, 彼らのバカンス期間の長さを反映して長期滞在型が多いようだ。たまたま, 知合ったという狭い知見にすぎないが, オランダ人の家族が7週間 (これはいくら何でも長く, やや例外的かも知れないが), ドイツ人の夫婦が4週間それぞれバリに滞在していた。

さて, 近年は日本からの旅行者が大幅に増えており, しかもヨーロッパ人達と違って, 短期滞在型の日本人観光客達は, 入れ代わりたち代わりやってきては, 短期間の間に巨額のお金をバリに落としてゆく。(バリの物価や経済を考えれば, それは単に比喩的にではなく, 文字通りの巨額といっていと思う)そして, 当然のことながらこれによってバリ経済は左右され, また, そうした日本人観光客に対応すべく日本語の需要圧が高まってくる。たとえば, 私が最初にバリを訪れたのは7年前(1990)であるが, その頃はすでにかなり多数の日本人がやってきていた。しかし, 一方で現在ほどには団体客が押し掛けるというほどではなく, 個人旅行者の方が主流であったように思う。その頃, バリのみやげ物屋や, ホテルでは英語は十分に通じたが, 日本語はまだせいぜい「安いよ。千円」などといった程度であった。ところが, 昨年(1996)になると, ほとんど日本人客などきそうにもないレストランのウェイターが, かなり流暢といっていよい日本語で話しかけてきた。もっとも, 彼は日本語学校で勉強したといっていが。また, ジンバラン村のはずれで飲み物とささやかな手作りのみやげ物を商っていた若い女性と, その店を手伝っていた弟(小学生)も, 英語は当然話し, (もっとも, 弟のほうはたどたどしいのだが, それでも普通に意志疎通が可能な程度には話した)さらに, できれば是非日本語を勉強して話せるようになりたいと語っていた。もちろん, 彼らの商売, あるいは今以上のキャリア・アップのためである。今のように日本からの観光客が今後も増え続ければ(そして, その将来性は十分にあると考えられるのだが), バリでの日本語話者の人口もまた増え続けていくものと思われるのである。

〈バリのヒンドゥー〉

これまで、現在のバリをめぐる状況を見てきたのだが、そういった背景にはバリの宗教をめぐる状況が深く介在しているため、おそまきながらそれについて述べておきたい。

インドネシアは、ほぼその全域にわたってイスラム教が浸透しているのであるが、(イスラム人口の上からは、本家ともいうべきサウジアラビアなどのアラブ諸国をしのいで、実に世界最大である)バリはその全島で例外的にもヒンドゥー教の文化圏を形成している。(ただし、一部にはバリ・アガと称されるいわゆるアニミズムを奉じる村々がある。また、フローレス諸島などではキリスト教が信仰されている。)

この地域へのヒンドゥー教の侵入は古く、遠く1世紀くらいまでさかのぼると考えられているようだが、ジャワ島にある名高いボロブドールが9世紀頃のシャイレンドラ王国による仏教遺跡であるように、かならずしもすぐに伝播していったわけではない。碑文の上からはジャワ地域へのインド文化の伝播は8世紀ということになっているようだが、1343年にマジャパイト王国がこの地を征服したが、やがて15世紀になってこれがイスラム勢力によって圧迫され、ジャワ島のヒンドゥー教徒が大規模にバリに移住したことが今日のバリ・ヒンドゥーの基礎を形づくったようである。⁵⁾

こうしてバリのヒンドゥー信仰は現在に受け継がれ、またヒンドゥーの強い影響のもとに文化と社会を形成しているのである。ただし、それ以前からバリにあった習俗や信仰との混淆が見られ、インドの文化や制度などを受け入れながらも、おのずと独自のものとなっていくのである。たとえば、カースト制を例にとれば、ブラーフマン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラの4カースト(ヴァルナ)が、バリにも存在し、そのうちのおよそ90%はシュードラに属しているのだが、いわゆる「不可触賤民」は存在していない。また、ヴァルナを越えての通婚も比較的ゆるやかであるようだし、インドのようにカーストと特定の職業との結びつきは、祭司などをのぞいてはほとんどないといってよいようだ。昨年、バリに滞在したときに、サヌールでのことだが、ビーチに沿って何軒もある小屋掛け程度のみやげ物屋が並ぶ中に(そのほとんどは個人、または家族経営である。)、一人の女性店主がいて、彼女はブラーフマン階級であった。他の女性たちは皆シュードラなのだが、そして彼女がみずからブラーフマンだと名乗ったわけではないが、周井の人たちは彼女はブラーフマンなのだと私に告げた。飲んだくれの夫に去られ、今では一人でその小さなみやげ物屋を営む彼女と周囲との差は、少なくとも見掛け上はまったくといっていいほど見られないし、また、互いに普通に付き合っているのだが、やはり、意識の上ではそれぞれにいくぶんかの違いといったものはあるのだろう。

なお、余談になるのだが、バリでは（あるいは豊かな熱帯地方ではというべきか）、女性たちがとてもよく働き、一方、男たちの中には（そしてこれがけっこうたくさんいるのだが）日がな一日、鶏の世話に明け暮れ、およそ労働らしきことをしていない者たちが目立つ。この鶏はもちろん闘鶏用のものであり、そして闘鶏こそが多くのバリの男たちにとっての最大にして最高の娯楽なのである。

さて、このようにバリは宗教的にはヒンドゥーの支配下にあるが、このことはまた、観光資源としてバリに絶大な貢献をもたらしているといえる。まず、バリ・ヒンドゥーの総本山ブサキ寺院をはじめ、タナ・ロット、ゴア・ガジャなどの名高いものから、それこそ小さな村のブラ・ダラムにいたるまで、ひじょうに多くのヒンドゥー建築を見ることができる。そしてそれらは、よくバリの観光ポスターなどに使用されている「割り門」に象徴されるように、細部にまで細緻な彫刻が施されたものであり、ヨーロッパ人観光客のみならず、われわれにも十分にエキゾチックな魅力を喚起するのである。さらには、オダランをはじめとした宗教儀礼がこれまたバリ暦にしたがって、頻繁に催されるのである。

ところで、ヒンドゥー流入以前からあったとされるバリの神聖・不浄観は、「カジャ」（聖なる山アグンを中心とした、山・内陸の方角）と「クロッド」（不浄なる海の方角）といった対比観によって表明され、今もこの観念はバリの全域で強い支配力をもっている。そして、この対比は単に宗教儀礼において重要であるばかりではなく、日常の生活にまで特別な意味を持っており、それは人家の配置にまで及ぶのである。

〈おわりに・バリの芸能と観光の今後〉

これまでバリの芸能と観光をめぐる述べてきたが、ここで総括的にバリの今後を展望してみたい。まず、はじめに世界の、あるいは少なくともアジアのリゾートの概況を見てみたが、結論的にはそのいずれもが、それ相応には快適であるものの、いずれもが似たりよったりであり、何処へ行っても大きな違いはないのではないかと考えた。しかし、ことバリに限って言えば、リゾートとしての条件を完備しているばかりか、そのみならず、バリ・ヒンドゥーの建築物、さらにはこの地特有の芸能が付加価値を持っていることを述べてきた。つまり、アジア各地のリゾートがマンネリ化したとしても、バリには依然として新たな集客能力が、少なくともその余地があるということである。したがって、今後アジアが注目されるほどに、むしろそうなるほどにバリの魅力は高まるということになるのではなからうか。なお、現在各国から来る観光客はバリ南部のクタやヌサドゥアなどの地域に集中しているといっていよいが、しかし、その一方で特に最近では内陸部のウブッなどにもバリ独自の芸能やオダランを求めてや

ってくるようになった。バリでは、そもそも本来は公開しないはずの葬送儀礼にいたるまでがいまや観光の対象となっているのである。そしてそこには、バリ特有の宗教観があるのだろう。いずれにしても、バリがその民俗性や独自の宗教儀礼、芸能を我々の前に開示しつづける限りにおいて、今後ともに益々バリへの注目は高まり続けるに違いない。バリははたして何でも許容しつづけるのであろうか。それとも、パロン劇やパフォーマンスがそうであったように、常に見られるものとしての「他者」と対峙しつつ、それでいてそこに伝統を踏まえたバリ独自の文化の再創造・再生産を続けるのであろうか。その意味でも、バリは今後もっとも注目され続ける地域であり続けるだろう。

注

- 1) 吉田禎吾編著「バリ島民」弘文堂・他を参照した。
- 2) 以下のバリの地名のカタカナ表記は慣例によった。ただし、ウブドはウブツと表記した。
- 3) 中村雄二郎「魔女ランダ考」岩波書店
- 4) 渡辺他「バリ島 楽園紀行」他を参照した。
- 5) 吉田禎吾監修「神々の島バリ」春秋社を参照した。